

歌らよみ 書よむ人は てあらして ふかさらめやも
 おもしろき この物の音を 世の中の みやひを誰か
 知らてやとあらむ

流車

豊 穎

富士のねの 雲のたちるを どきあく うつると人いふ
 飛鳥川 水の淵瀬を さためなく かねると我聞く
 山川を 直路につくり 石炭を けふりとあして
 久方の 天をくろまし あらかねの 土とよもして
 たはしり はしる車の 窓の外を 見つしをれば
 小林は 田畑どかりり 山去りて 海原ひろし
 あやしくも かける車か くそしくも つくれるわさか
 千早振 神業ならぬ 人の世にして

反歌

行きどほり國原見れり天雲にそりたしけむ神代しおもほゆ

詠横濱瓦斯燈歌

辨 玉

大船の とつる湊の 横濱の もろ國人の
 あきしこり つとへるちへに 物ごとに たよりよかれと
 かしこきや み思ひかねに から國の ひとのさとりて
 くすしくも たくみ出てたる 燈火を こゝにもうつし
 立てあめて つくらせりけむ あかねさす 日のくれゆけり
 天つ星 つらがるちして 大空も かやくのかり
 うつろへる 火の氣かをりて 雨ふれど 雨にもきえと
 風ふけど 風にもゆれす やちまたの 市の植木の
 青柳の もゆるめさしも さく花の 八重かささるも
 並松の 玄けき葉末も くまもおちす さやに見ゆれり
 とこしへに ひるゆく國と うつたへに 夜なきさどい
 よもすから いゆきかへらひ ゆくくも 高くそあふく
 かやくける この燈火の 天地に いてりとほれる

○今様

今様とは、七五の調にして、中古以來、専ら行れし謠ひものあり。これに種々の變体あれど、七五の詞、四音らへたるを普通とす。七五の調は、五七の調とことなり、ともすれば俗におちいらやすきものなれば、詞を撰ひ、調を考へ、さしめて優美にものすへきものあり。

若菜

讀人不知

園生の梅の追風に

わか住む山も春めさぬ

花

若菜つむへく野のありぬ

慈

鐘

春の彌生のあけほのに

四方の山邊を見わたせば

花さかりかも白雲の

かゝらぬ峯こそあかりけれ

郭公

同

花立花もにはふきり

軒のあやめもかざるあり

夕くれさまの五月雨に

山ほどゝさす名のりして

月

同

秋のはしめになりぬれば

ことしも半はすきにけり

わかよふけゆく月影の

かたよく見ることはかきけれ

雪

同

冬の夜さむの朝はらけ

ちきりし山路は雪ふかし

こゝろのあとはつかねども

おもひやるこそあわれなれ

松の木蔭

妙音院入道

松の木蔭にたちよれば

千とせのみどりそ身にはしむ

梅か枝かさしにさしつれば

春の雪こそふりかゝれ

春興

大

平

春のやよひに野邊見れぬ

まみれ花さく山みれぬ

雪かあらぬかそこかしこ

さくらの花もささきそめぬ

月花

菴

山

雲のかゝる月のため

風のちらすと花のため

雲と風とのありてこそ

芳野山

花よりあくるみよし野の
もろこし人もこま人も

寢覺の窓

ねさめのまどの小夜あらし
ちきりし人のかれにしを

都花

上野の花よ日ぐらしや
こゝろくに向ふしま

丸木橋

うれしやこゝに山かけの
花見る人のためにとて

花染衣

花そめ衣ぬさかへて

月と花といたふとけれ

山

春のあけはの見わたせの
やまとこゝろにありぬへし

内

うつりしくれかもみち葉の
赤に今さらに音つれむ

同

明日の淺草飛鳥やま
とるのあそひそのとかある

同

谷の小川の丸木のし
いかなるをちかわたしそ

同

卯の花かさねうちきつ

陽

遠

讀人不知

すゝしき月をまつの戸に

小蝶

宿のまかきの朝かほの
あられ小蝶の朝いして

初見

君をとしめて見る時の
御前の池なる龜岡に

蓬萊山

蓬萊山に千とせふる
松の枝に鶴巢くひ

鶴群

鶴のむれゐる松山に
よひひの君かためなれや

君か齡

君かよとひいさゝれ石の

今様

山ほどゝさす音つるゝ

同

露のけぬるをまぢかほに
たか身とあれる夢や見る

佛

千代も經ぬへし姫小松
鶴こそむれるてあそふあれ

妓

萬歳千秋かさなれり
いのはの上には龜あそふ

讀人不知

千代に八千代をかさねつゝ
天の下こそそのとかなれ

同

いのはとありてむすぎに

生ふる小松のかけふりて

鶴の巢こもる代々までも

八千世

讀人不知

おかし事いふ老か身を

をかしと人のいふめれど

君の千代ませ八千代ませ

君の千代ませ八千代ませ

まほの山

同

みちひたえせぬまほの山

さし出の磯の友千鳥

君かよひをいく千代と

聲もゆたかにあきかひす

三番叟

諸

立ちまふ袖につゝみても

あはわまりあるうれしさを

さやけき鈴の音にたてゝ

君か千とせの數そへむ

櫻川

讀人不知

なかれもきよきさくら川

いとへの宮のさと神樂

花の木かけにかゝやきて

劍のまひのいさましや

武夫

同

すめら御國のものゝふは

いかかる事のかつとむへき

たゝ身にもてる真心を

君と親とにつくすまで

たゝの山

司

よし野の山もをはつせも

花かさかねはたゝの山

曾我兄弟も大石も

かたきうたねいたゝの人

辞世

親

人の死ぬるとき死なされは

死ぬるにまさるさちありと

世のことわざもよそぢらす

せまるわか身をいかにせむ

春

弘

みもすそ川も氷とけ

たかくら山もかすむなり

うちどの宮のへたてなく

さかゆる春になりけり

夏

同

ほとゝきすまつよひやみの

空をあされどふもふまに

さみたれはるゝ雲間より

月もほのかにさし出てゝ

秋

同

あきつとひかふ草の葉に

秋のはつ風ふきそめて

書

施

訓

入日のかけはてりあから
冬

ゆふへすゝしくまりにけり

讀人不知

園生のたけの下をれの
ふるとしもなくふる雪の

音そをりくきこゆなる
いかに夜ふかくつもるらむ

實 定

舊 都

古きみやこに來て見れば
月のひかりのくまなくて

あさちか原とそわれにける
秋風のみそ身にはしむ

宣 長

柴の戸

世のうき事はのかれすむ
あらしの音の身にしみて

柴のあみ戸にさすかまた
都こひしき山のおく

同

詠 史

むかしをどこと身のまりて
春やむかしの春ならぬ

のこることはの花は猶
とはかり今もにはふかり

同

よしの山

よし野の山にいりにける

人はゆくへもえら雪に

こひしき人をえたひても

いつこを春とたつねまし

讀人不知

琴の曲

峰のあらししか松風か
駒をひかへてきくほどに

たつぬる人のことゆ音か
つま音えるき想夫戀

大 平

舞の名

舞の名におふ青海の
聲のえらへもすむ月の

なみたち出てゝあかめする
かつらの殿にきこゆらむ

侍従大納言

手 枕

君かあけこし手枕の
おにしにひまなくむつれけむ

たえて久しくなりにけり
なからへもせぬものゆゑに

敦 兼

白 菊

ませのうちある白菊も
われらかかよひて見し人も

うつろふ見るこそあはれなれ
かくしつゝこそかれにしか

讀人不知

木曾路

信濃にあるなる木曾路川

君にかもひのふかければ

今様

みきはに袖をぬらしつゝ

竹のよ

竹のよなかくあはれある
人にまられぬこひもして

水車

まくらにひく水車
まはしまどろむ夢の間も

難波の梅

難波の梅の下ふしの
花さき里にゆくかりの

神祇

かきたの社の宮居には
わけの鳥居のかみさひて

山家鳥

世はちれてすむ山かけの

五二四

あらぬ瀬をこそすきつれ

讀人不知

ふしもさためす起居つゝ

鳥のさくまでねもやらす

同

夜ふくるまゝに音たかし
まくらにひく水くるま

眞

徴

一夜はかりのこゝちして
鳴く音を旅の道しるへ

弘

訓

いかなる神のますやらむ
木のまに千木も見えよけり

同

庵はどひくる人もなし

軒のこすゑにゐる鳩の

友よふ聲を友にして

○旋頭歌

旋頭歌は、短歌の如くにして、三の句に、七文字の一句を挿みて、聊調を舒はしたるものなり。四の句よりよみはて、一の句に旋りよむも、その意は同じき故に、かく名づけたるあり、此体万葉集以下の集に、往々見ゆ。短歌にくらぶれば、其數甚少けれども、今聊抄出して、その例を示さむ。もと題なきもあれど、初學の便のため、假に題を設けたり。

寒過春來

讀人不知

まら雪のどこしく冬のすきよけらしも春霞たき引野へのうくひすなきぬ

梅

同

春されは野邊に先さく見れどあかぬ花まひさしにたゝあなるへき花の名なれや

春夜待月

同

かすかある三笠の山に、月も出てぬ、かもさき山にさける櫻の花のみゆへく、

野撫子

同

旋頭歌

五二五

たかまどの秋の野のへなてしこの花うらわかみ人のかさしゝきてしこの花

折撫子

鹿人

いめたてゝとみの岡邊のきてしこの花ふさたをりわれのもていなむなら人のため

秋萩

憶良

萩の花尾花くす花なてしこの花をみかへしまたふちはかま朝かはのはき

旅泊待月

讀人不知

ぬは玉のよわたる月にはやもいてぬかも海原のやとしまのうへゆ妹かあたり見ゆ

紅葉

貫之

君のさす三笠の山のもみち葉の色神無月時雨のあめのそむるなりけり

水鳥拂霜

讀人不知

埜玉のを崎の池にかもそはねさるかのか身にふりかける霜を拂ふとにあらし

忍戀

同

はた薄きには咲き出てぬ戀を我するかきろひのたゝ一目のみみし人ゆめに

切戀

同

なにせむに命をもとな永くほりせむいけりとも我おもふ妹に安くおはななくに

寄風戀

同

たまたれの小すのすけきよ入りかよひこねたらちねの母かとはせは風とまをさむ

寄柳戀

同

あられふりとほつあふみのあと川やなきかりつれと又もあふちふあと川柳

寄杉戀

同

初瀬川ふる川のへにふたもとある杉としをへてまたもあひみむ二本ある杉

寄蘆戀

同

みなどのあしのうら葉を誰かたをりしわかせこかふる袖みむとわれそたをりし

寄神馬藻戀

同

梓弓引つのへなるなのりその花つむまてにあはさらめやものりそのはな

寄菅戀

同

橋たてのくらはし川のかはのまつすけわかゝりて笠にもあまそ川のしつすけ

寄秋蟲戀

同

こほろきの我床のへにききつゝもとあきさむつゝ君にこふるにいのねらえぬに

寄玉戀

讀人不知

にひ室をふめるまつ子か手玉ならずもたまのこどてりたる君をうちへとまをせ

寄名所戀

同

山代のくせの社のくさきたをうそかのか時とたちさかゆともくさきたをうそ

深夜戀

同

天の原ふりさけい見れ夜そふけにけるよしゑやしひとりぬる夜の明けのわけぬとも

秘戀

同

わたの底沖つ玉ものなのりそのはきいもとあれとこにしありとありのりその花

羈中憶都

同

あをによし奈良の都にゆく人も草枕たひゆく舟のとまりつけむに

羈中思

同

あをみつらさよみの原にひとあひぬかもしはしの近江縣の物かたりせむ

寄玉述懷

元興寺僧

まら玉の人にしらす知らすともよしまらすとも我しまれらひまらすともよし

寄水懷舊

讀人不知

百しきの大宮人のふみしあど所おきつあみさよらさりせのうせさらましを

草

同

此岡に艸かるをのこまかなかりそねありつゝも君か來まさむ御馬艸にせむ

鶯

同

澁谷のふさか山に鶯そ子うむちふさしはにも君かみためにわしそ子うむちふ

酒

同

かすかなる三笠の山に月の船いつみやびをの飲む杯に影の見えつゝ

衣

同

君かためたちからつかれかりたる衣をはるさらしいかざる色にすりていよけむ

○物名

物名とい、歌の詞の中に、物名をよみかくすをいふあり。こゝ一通よみわたしたるにてり、容易にその物名のこもりをるがわかぬやう、いとたくみたによむへきものあり。

からものな、(韓桃木)

深 養 父

物名

五二九

あふからものばなほころかきしけれわかれむことをかねておもへり

かひなくさ (水苔)

深 養 父

ぬい玉の夢になにかのきくさまむうつゝにたにもわかぬころを

やまかきのき (山柿木)

讀 人 不 知

秋のきぬいさやまかきのきりくすよさくさかむ聲のさむさに

まのふくさ (忍草)

俊 貞

山高みつねにあらしのふくさどにはひもあへす花をちりける

かみやかり (紙屋川)

貫 之

ぬい玉のわかろかみやかりるらむかゝみのかけにふれる白雪

うつせみ (空 蟬)

春 海

ぬくひうつゝのみの小川の清き瀬にゆふどりかけて夏にくらさむ

れんげさう (蓮花草)

同

春ふかみ園生にたれもあくかれむけさうくひすの聲老いぬとも

からこと (唐 琴)

直 枝

冬されのさむさくらひといひなからことわりすきていこそねられぬ

かみやかり (紙屋川)

同

山たかみやかりけふりもしら雲にたちやまされむみねのすみ電

よふことり (呼子鳥)

同

なつかしさをゆりのさけと草かると野へにかよふことりてたに見す

からさき (辛 崎)

茂 勝

ときりある松ありあからさき出し花かど見えてちれるしら雪

たちいな (立 花)

同

おもかけのたちいなれすて見えなくむうつゝに人のよしとすとも

ひともとさく (一本菊)

千 蔭

たれかこよひともとさくらむ故郷の軒のすくるやまほどとさす

ころも (衣) とかま (袴)

同

もみちしてころも経なくにちちりしけいとかまくをしき庭のおもかな

しもつけ (下 野)

同

さくとしもつけあひ行きて見えやさむ君か垣根の秋草のさ

しらす (新羅) くらら (百濟) こま (高麗)

長 流

物名

五三二

し。ら。さ。く。の。ま。か。き。に。霜。の。く。た。ら。す。い。う。つ。ろ。ふ。色。を。こ。ま。か。に。見。し

ひかし(東) 又し(西) みきみ(南) きた(北) 契 沖

い。く。た。ひ。か。し。を。る。野。風。に。ま。か。る。ら。む。み。み。た。れ。に。ま。た。を。る。花。さ。く

どこ(床) ふすま(衾) まくら(枕) 同

や。と。こ。に。も。し。は。た。る。て。ふ。す。ま。人。も。我。袖。あ。り。や。い。ま。くら。へ。見。む

すゝり(硯) すみ(墨) ふて(筆) 同

し。の。ふ。の。や。わ。れ。い。ま。た。見。す。す。り。衣。す。れ。す。み。た。れ。の。に。は。ふ。て。ふ。な。り

みの(簑) かさ(笠) あした(足駄) 同

露。の。み。の。な。に。か。さ。ま。く。物。の。か。も。ふ。わ。した。の。ほ。と。を。千。代。と。た。の。み。て

阿波、安藝、攝津、隱岐、紀伊、出羽、壹岐、安房、志摩、駿河、の國名十

あ。は。れ。あ。の。草。に。つ。ゆ。あ。つ。き。い。て。は。い。き。て。あ。は。ま。し。ま。ち。も。す。る。か。に

麻、蔡、蘭、薦、藺、獨活、羊蹄、菱、水葱、藜、の草名十 同

あ。さ。ま。し。や。あ。ふ。ひ。も。ま。ら。に。こ。も。り。て。う。と。し。さ。ひ。し。と。な。き。や。あ。か。さ。む

栗、栢、柿、楠、桃、檜、梅、郁、榎、櫨、の木名十 同

く。り。か。へ。し。か。き。つ。く。す。と。も。も。し。ひ。と。の。み。や。ど。が。む。へ。さ。え。や。は。ま。の。は。む

鶺鴒、雁、鴉、郭公、鶯、鶺鴒、鴨、鴨、の鳥名十 古 道

う。の。花。の。さ。さ。の。さ。か。り。に。は。と。い。ま。す。と。ひ。さ。つ。る。ひ。は。め。つ。ら。し。さ。か。も

○折句

折句とは、句のはしめ毎に、物名地名等のことばを用ゐ、その句のはじめばかりをよみゆけり、やかて、その物名地名等になるをいふなり。

かきつはた 業 平

か。ら。衣。き。つ。あ。れ。に。し。つ。ま。し。あ。れ。い。は。る。く。さ。ぬ。る。た。ひ。を。し。そ。お。も。ふ

をみきへし 貫 之

を。く。ら。山。み。ね。た。ち。あ。ら。し。さ。く。鹿。の。へ。に。け。む。秋。を。し。る。人。そ。な。き

むそちの資 枝 直

む。ら。た。て。る。そ。の。ふ。の。竹。に。さ。き。り。て。そ。の。と。か。に。千。代。の。か。す。り。か。そ。へ。む

きつのはね 同

な。ひ。く。ま。て。つ。ゆ。こ。そ。む。す。へ。の。へ。の。風。ふ。き。き。み。た。し。そ。ね。し。ろ。高。か。や

折句

五三三

こまむかへ
 こまむかへ
 こまむかへまの、浦舟むやひしそかしふりたてよへなみたかしも
 あかす見むはるもさかりののつかさにくもかどのかりにはふさくらは

春

海

音冠

音冠の、や、折句にひとしきものなり。折句の句毎のはしめのみなれど、これは句毎のはしめをはりにものするあり。はしめを冠といひ、をばりを音といふなり。左の例歌のうち、第一の、句のはしめをばりと、つきくによめは、おとぎ久しくどはぬといふ詞あらはる、あり。第二の、句毎のはしめをよみ、ふた、ひたちかへりて句毎のをばりをよめは夜ふけ月かたふさぬといふ詞あらはる、あり。第三、第四の、句毎のはしめをよみ、次に句毎のをばりを下より初句の方へよみくあるあり。春のくれに友たちのもとへおとや久しくどはぬといふことを、阿さほちれどやま風かよひさむからしくもはのこれとはなはたまらぬ。夜ふけ月かたふさぬといふことを、同

阿

同

よしやわかふりぬればまたけにそいとふつねにこひしきさみか来まなぬ
 よねたまへせにはしといふことを
 よもすしねさめのかりはた枕もま袖も秋にへたてさきかせ
 よねいなしせにすこしといふことを
 よるもうしねたくわかせてはてはこすなほさりにたにまはしとひまを

兼

好

頓

阿

廻文

廻文とは、歌の後方よりよみても、おなしものなるをいふ。これは歌よみの、おのたたくみをあらはさむとて、よむものにて、た、文學上、一のさくさみに過ぎざるものなり。さてはその作例の如きも用なるへし。されど廻文とはかゝるものなりと知らせむかためよ、左に一二首をか、けむ。

竹むらの雪のうた
 どくたしさとのかかむら雪まろしきゆらむかたのとさしたくと

むら鳥のうた

古

道

むら鳥のはおれたちもす枝に葉にたえずもらたれ繩はりとらむ

新撰歌典終

枕詞

枕詞は、一よ冠辭ともいへり。凡て縁故ある詞をもて、句の上には置き、語調を整ふるものあり。概ね五言に定まれり。今こゝにそのおもなる例を擧ぐ。餘は作者の應用に任せむ。

(あ)

ひさかたの

天(日指す方の天とつゝく)

ひさかたの

天照月

ひさかたの

天の香山

夕月夜

曉やみ

鳥が鳴く

あつま(鶏が鳴く明といふよりあにかく倭建命東國を望みて吾妻はやどの給ひしより東國をあつまといへり)

あかひく

寐の眼の

朝(赤ら引くにて旭日の差渡る朝の意あり)

露霜の
群鳥の
朝鳥の
阪鳥の
飛鳥の
燈火の
居待ち月
吾心
小繩なす
葦芽の
花ぐはし
さくらさぎ
ありぎぬの
石橋の
妹に戀ひ

秋

朝起ち行けり
朝起ち
朝越え
明日香（飛鳥のかすかの意なり）
明石
明石
明石の浦
悪しき神
蹇（足萎）
葦垣
悪（小萩葎より轉ず）
わりての後も（ありを重ぬ）
近江（合ふ）
英虞の松原（吾待つ意）

うまこりの
うまじもの
玉の緒の
玉櫛笥
玉籠
たゝまつく
庭に立つ
淡島の
眞草かる
眞木の立つ
水鳥の
御執らしの
御食向ふ
みけむかふ
沖つ鳥

綾（美く織りたる綾の意）

阿倍橋（味物甘橘の意）
問
蘆城（あは開より轉ず）
逢はむ（蓋と實と合ふ意）
青垣山（楯並附山）
麻で小袋（では布の約）
逢はぬものゆる
荒野
荒山
青葉の山（翠羽）
梓の弓
淡路（粟）
味原の宮（味は味是あり）
味原の原

行く鳥の
吾妹子に
未通女等に
吾妹子に
吾妹子に
鴛鴦の
荒磯波
空のごと
夕月の
天つ水
にのくもの
山の井の
照る月の
埋れ木の
雕鳩居る

争ふ
逢坂山
逢坂山
近江の海(逢)
淡路の島
足濡れ来る
有り
仰ぎ
仰ぎ
仰ぎ
仰きてまつ
あせか絶えんど(布雲の何か絶えむの意)
浅き心
飽がさる君
顯はるまじき
荒磯

霞打つ
濱洲鳥
草蔭の
足引の
明星の
翼あす
さな葛
呉服とり

あらし松原
足惱む
荒藪の崎
嵐(山の嵐といふ意)
明くるあした
あり通ひ
ありゆき(這ひ行く意)
あや(綾)

(い)

魂極る
たまきはる
現身の
うつせみの
さにつらふ

命
幾代
命
妹
妹(小丹出らふにて赤き美しき顔の意)

玉梓の
 玄きたへの
 ぬばたまの
 ぬばたまの
 敷たへの
 倭文環
 あしひきの
 水傳ふ
 白檀弓
 まらまゆみ
 つぬきはふ
 降る雪の
 やつめさす
 白波の
 伊香胡山

妹(たまのとは鳥瓜のからすまのかき美しきものあり)
 妹(敷布は寝具いはいとふにかゝる)
 夢(ぬばたまは射干ひよこの實みにて黒きものなり夜の夢をかゝる)
 妹(夜の寐いといふよりかく)
 家
 賤しき(彌茂いよしきの意)
 岩根
 磯
 磯(射)
 今
 岩(羅歷つらまふなり)
 若けむな(白)
 出づ(彌芽いよめ指し出る意)
 いちじるく
 いか

たもとほり
 飛鳥の
 陽燄ひかりの
 行く水の
 涙の穂の
 くもるすす
 神風の

伊南の里(踏躰ふみだまり行くより伊にかく)
 至らむ
 石垣(神代紀に沙石自舎火とありこれによりて石にかく)
 彌ましにのみ
 いたふらしもよ(甚震いんげんしあり)
 心いざよひ(雲の如く猶豫の意)
 伊勢(太古伊勢いせは伊勢津彦といへる神ありて風を吹せしことあり
 故にかくいふ)
 いざ(味鴨の友を誘ふ意)
 いや遠長く
 五百重いほむがくれ
 池田の河曾
 五十槻いっさ(五十いの百より足らぬ也)
 篋いかだ(五十)

あちむらの
 はふ鷲つたの
 白雲の
 水濁る
 百足ももらす
 もたらす
 彌雲立つ

出雲

やくもらす

吾妹子を

妹か門

妹がかど

妹が家に

妹等許

猶並めて

たゝめて

百つたふ

ものゝふの

真木積の

拆鈴の

さく釧

天雲の

葎延ふ

出雲

いさ見の山

入泉川(出入)

出入川

伊久理の杜(往)

今木の嶺(今來)

引佐の山(射)

泉の川

磐餘(五十)

石瀬の杜(武部の稜威といふより轉す)

いつみの川

五十鈴の宮

五十鈴の宮(釧の玉の飾にて鈴きとつけたり)

雷山

賤しき宿

こゆるぎの
さくがにの
釧太刀

(ろ)

いそぎ(磯より急にかく)
糸(小蟹にて蜘蛛のこどもあり)
いかこ山

玉の緒の

たまきはる

つき草の

紅の

紅葉の

唐棣草色の

つさくもの

玉藻なす

靡く藻の

古衣

現し心(美)

宇智(魂極る息より轉す)

うつし心(つき草の露草にて其花うつろひやすきものあり)

うつし心(移)

移り往ぬれり

うつろひやすき

うつろひやすき

浮べ流せれ

美し妻

打捨人

薄氷の
庭雀
玉垣の
鶯どりの
玄くしろ
木抄閣
日暮曇り
島つ鳥
我心
鹽籠の
梅の花の
鴨じもの
わたつみの
勇魚取り
うすまゝどり

薄き心
うすまゝり居て(うつくまゝり)
中つ國
うすまゝり居れり(心鳴)
熟睡(繁釧美とかゝる)
四月
碓日(きはのど通ふ海日どつゝく)
鷄
浦洲の鳥(心安の略)
うら(浦より心にかけてり)
憂きこと
浮寐
海(海は船にて渡る故わたつらみどらふ)
海
海路

うすまゝどり
鳥じもの
玉櫛
夏麻ひく
ちはやふる
ちはや人
眞鳥住む
秋柏

近江の海
海に浮き居て
畝火の山(櫛を項に懸くはらふより轉す)
海上瀆
宇治(稜威早振とあるらつとらうぢに轉す)
宇治
うすまゝの杜
うるや川への(賣)

(れ)

天雲の
玉櫛笥
朝霜の
露霜の
闇夜あす

奥かゝる知らず
奥
起きてしくれば(置)
おきてしくれば
思ひ惑ひ

鳴神の
天彦の
梓弓
行く水の
みなごこふ
はしむかふ
玉くしげ
朝霧の
玉藻茹る
わたつみの
わたの底
空數ふ
さよつらふ
遠つ神
やすみまし

音
音
おど
音きしより
かみのをどめ (水底歴魚どかゝる)
弟 (愛し向ふ)
覆ふ
おほ (凡、おほつかさきの意)
沖
沖
沖つ深江
大津 (凡)
我王
我王
我王 (安く治す王の意)

すしきの
さなみの
鳩の
ます鏡
白浪の
朝髪
立つ鳥の
若草の
はふ鷺の
春霞
水ぎらふ
みつさつむ
白露の
青幡の

大宮 (百石よて疊み園む城の意)
大津の宮 (さゝ波り近江一体にかゝる總稱)
息長川
面影さらす (真澄鏡)
おもしろ君 (面識)
思ひ亂れて
思ひ過ぎめや
思ひ着きにし
おのがむき (各自方向)
おほにし思ひ (凡)
奥つ小島 (水遮る)
大藏山 (貢積む大御倉の義あり)
置
忍坂の山

(か)

あもりつく
玉 葛
玉 櫛
袴領巾の
まそ鏡
倭文環
衣手の
朝鳥の
いにくやす
月人の
入日なす
塵土の
綱鳥の
夕月の
鳩鳥の

神の香山
懸
かけ
かけ
かけ
数
かへる
通ひ
かしこき(岩崩す畏き)
桂の枝
隠れ
数にもあらぬ
掛らぬましもよ
かゆさかくゆき(左往右往)
片戀ひ妻

磯貝の
焼鹽の
しなてる
薪こる
いさむしろ
たさちのふ
千早振
蛸なも
みもろつく
石橋の
美酒を
真葛のふ
春日の
朝日ささ
霞立つ

かたこひ
辛き戀
片岡山(靡ひ立てる片にて直立にあらず)
鎌倉山
川添柳(寐席皮とつく)
神(靈幸神)
神(いちのやふる神とつく)
耀く神
鹿背山(三詣に齊く神といふよりつく)
かみなび(石橋の並ぶ意)
かみさび山(醸)
春日
春日
春日の山(此山の奈良京の東にあり)
春日の里

吾妹子に

露草の

天飛ぶや

霞降る

青柳の

拮結ふ

ことさへぐ

さへづるや

庭つ鳥

沖つ鳥

遠つ人

遠つ人

若菰を

鴛鳥の

沖つ藻の

衣春日(衣貸)

假ある命

鹿島(喧)

葛城山

葛城山

唐の崎(言さわぐ唐人よりつゝく)

韓確

雞

鴨

雁(來鳴かむ)

狩路の池(雁)

かりちの池(対)

葛飾(水を被くより轉す)

隠れの山

大船の

玉藻かる

生弓の

玉藻をす

花かつみ

春の田を

夏衣

冬草の

(き)

楫取の海

辛荷島(対)

甲斐(反)

かよりかくより(右寄左寄)

會ても知らぬ

かへす

楫取の浦(鎌)

かる

茜さす

さにつらふ

さす竹の

麻裳よし

さぬつ鳥

君が面

君

君(榮ゆる君の意)

き(着)

雉子(小野鳥)

まそかゝみ
律生の
御食向ふ
吾妹子を
眞金ふく

清き
穢き宿

木の部の宮 (酒瓶)

聞都賀野へ

古備の中山 (古の吉備國にて金をふけり)

(く)

みづくし

久米の子等 (神武天皇の御製にみつくし久米のこらとて久米の兵

士をほめてよみ玉ひし句あり)

鯨 (勇ぐはしにてくはしのはめ詞なり)

雲

懸れる雲

黒

我黒髪

君が悔ゆべき

いすぐはし
白妙の
しろたへの
ぬはたまの
ぬはたまの
岩崩の

河岸の
小蟹の
春草を
梯立の
指墨の
打靡く
眞髪ふる
言さへぐ
はたすき

(け)

妹がくゆへき (崩)
蜘蛛
馬昨山
倉梯山
栗栖 (黒)
草香の山
櫛稻田姫
百濟の原
久米 (薄組より轉す)

朝霜の
朝霜の
降る雪の
つき草の

消やすき命
消ちげなまく
消なけぬかに
消ぬべき戀

あざしもの

御木(消)

(こ)

群 膽 の

心 (膽の聚りたる心の義)

肝 向 ふ

心

打 靡 く

心

射る鹿の

心を痛み

梅 の 花

心開けて

標 標

心を盡し

朝 開 き

漕ぎにし舟(漕去)

荒 布 の

衣

敷 た へ の

衣

白 妙 の

吾衣手

うつゆふの

籠りて(うつゆふの幽なり)

まをさかる

越(靡ひ下る意)

み雪ふる

越

ぬば玉の

駒(黒のくよりこに轉す)

泣く子あす

言だに問はず

吾夫于を

なこせの山

まをこなす

子等

紫 の

粉濃の海(濃)

青 旛 の

木旗

(さ)

橋 立 の

さかしき山(嶮岨)

あぢむらの

騒ぎ(味鴨群)

小 蠅 なす

さわぐ

ありさぬの

さるく(どわく)

玉 衣 の

さるく

馬 酔 木 ぞす

榮え

綿花の

さかゆる

櫻花

さかゆる

左木の浦

このさだすぎて

三枝の

幸く

鹿の角

捧げて

玉銚の

里人(銚の狭利よりかゝる)

さねかつら

さねすは(小寐)

菱殻の

刺しけく

花くはし

櫻

隼人の

薩摩

春鳥の

さまよひ(彷徨)

珠裳よし

讚岐(指ぬきの意)

鳥綱張る

坂手

白鳥の

登坂山

つまこもる

小佐保(瓜隠る箭どかゝる)

女郎花

咲野

(名)

秋山の

またふる(下蒸)

玄ぬのめの

人に玄ぬべは(細竹群の玄ぬどかゝる)

夏草の

萎えうらふれ(うらふれい心詫なり)

夏草の

思ひ萎えて

春草の

茂き

下紐の

またゆ戀ふる(またゆのゆは下よりのよりの約)

泣く子さそ

慕ひ

おきつ波

敷きて

さゝれ波

まきて

いなむしろ

まき

柴の野の

屢

玉籠

鳴熊山(籠透間といふより轉す)

袴はかま 衾ふとん

新羅の國(白)

たぐづぬの

新羅の國(袴綱の白なり)

袴はかま 衾ふとん

白山風

袴はかま 綱つな の

白しろ 臂うで

袴はかま つぬの

白鬚

袴はかま 頗ひら 巾いん の

白濱浪

ふる雪の

白髪

隠かく 水みづ の

下しも ばへつゝ (よばへは呼なり)

置おき 蚊か 火ひ の

下しも がれのみ

ささ 々々 々々 々々 の

志賀

水みづ 無な 瀬せ 川がわ

下しも

籠かご り 沼ぬま の

下しも ばへ

水みづ そゝぐ

鮎あしな の 若わか 子こ (そゝぐは觸るゝ意あり)

みそぐ 刺さ る

信濃しんなん (みすゞは小竹あり信濃に生ひけむ)

尾花散る

雫しずく の 田居たゐり

下しも 種むね 山やま

下しも 行く水

女むすめ 郎らう 花はな 山やま

まぬべる君(ま)

白しろ 菅すげ の

知し られむ

荻かき の

心こゝろ もまぬ(ま)

陸りく 奥おく の

まのふ(信夫)

(す)

菅すげ の 山やま

すかきく

梓すげ 弓ゆみ

末

打うち 寄よ る

駿河(よするよりするこつゝ)

腰こし 細こ の

すがす 女むすめ (すがるは蜂あり)

紅べに 葉は の

過ぎにし君

行く舟の

過ぎて

行く川の

過ぎにし人

露つゆ 霜しも の

過ぎ(はかきと意)

唯鳩居る

洲

あぢの住む

洲沙の入江

(そ)

割竹の

そがひ (背向にて後向の意)

山菅の

そがひ (山菅の麻どかゝる)

眞菅よし

蘇我の子等 (麻)

白たへの

袖

蜻蛉羽の

袖振る妹

染木綿の

染めし心

邊つ波

磯

片統の

そこにぞ我は (底)

(た)

天雲の

たゆたふ (猶豫)

大船の

たゆたふ

みあせ川

たゆたふ

ありきぬの

寶の兒等

馬じもの

立ちて爪衝く

草枕

旅

紐解かぬ

旅

白たへの

袷

敷たへの

袂

玉の緒の

絶えじ

白雲の

絶えにし

延ふ葛の

絶えず

玉葛

たゆることあく

望月の

足れる面

望月の

たはし (港)

大船の

頼める

大船の
居る雲の
早き瀬の
龍田山
五百重波
白雲の
水鳥の
水鳥の
たちこもの
蘆鶴の
天雲の
まそ鏡
春花の
儲弦
石走る

思ひたのむ
立てば別る、
立あえぬ君
起ちても居ても
立ちても居ても
龍田の山(立)
立たむ粧ひに
立ちの急ぎ
立ちの騒ぎ(こもかもに通ず)
あなたづくし
たどきも知らず
直目に君と
貴からむ
断え間續かむ
たぎ(瀧)

石走る
うち渡す
大伴の
釧つく
衣手の
菰枕
ますらをの
木綿だゝみ
唐錦

垂水
竹田の原
高師の濱
手節の崎(釧は臂にかくる玉の飾なり)
田上山(てをたにうつす)
高橋(菰枕は高さあり)
たゆびか浦(手指)
手向の山
たつ(裁)

(ち)

ちの質の
栲綱の
浅茅原
細し矛

枕詞

父(ち)は橡より轉ず
千尋
茅生

千足るの國(日本紀に伊弉諾尊目三此國) 日日本者補安國細戈千足國

云々

(つ)

まさきつち
浅茅原
楫の音の
ぬば玉の
あら玉の
往く影の
馬の瓜
不知火
獵矢抜き
我 心
百傳ふ
狭衣の

附きて行ければ
つばらく(審)
つはらくに
月
月
月
筑紫(瓜衝)
筑紫(景行天皇行幸の故事による)
筑紫(衝)
筑紫(盡)
角鹿(傳ふ羅どかく)
小筑波(緒)

新治
鶯の住む
ありねよし
櫻の木の
若草の
枕着く
伏屋立
現身の
石松の
苧萱の
大舟の
夏草の
紐の緒の
あらかねの
御佩を

筑波
筑波の山
對馬(荒峯吉の意)
いやつぎく
妻
妻屋
妻問ひ
常
常
つかのあひたも(東の問)
津守
露衣
いつありあひて(附合)
土
劍の池

まそ鏡

照る

(て)

(と)

荒玉の

年(歳より轉す)

風の音の

遠つ吾妹

雲離れ

遠つ國邊

雲居あす

遠き

霞ふり

とはつあふみ(遠江にて允恭紀に打つや霞のたしくとあふみたり)

あゆ竹の

とに轉じたり

空竹の

とをよる子等(撓み寄るなり)

ささ竹の

舍人(とこ)を(と)こ(さ)す竹の遠く根さす(と)ら(い)ると(と)による

投ぐる箭の

遠ざかり居て

劍太刀

磨きし心

まそ鏡

床の邊去らず

焼太刀の

利心

まよつら

はや常敷(は)きに

居る鶴の

乏しき(友)

妹が手を

とらしの池(執)

いめたて

跡見(射部)立て(きり)

白鳥の

鳥羽山(飛)

はとぎす

鳥羽田の浦

洗ひ衣

取替川

焼太刀を

勵波の關

沖つ波

とをむ眉引(撓)

梓弓

引豊國

行く水の

時ともさく

巖あそ

常磐

山城の

とら(鳥羽より常にかけたり)

三枝の

中

三つ栗の

中

沖つ藻の

靡きし妹

鳩鳥の

さづさび

鳥じもの

さつさび

引く綱の

さつさび來む

馬じもの

繩どけ附けて

潮船の

並へて

菅の根の

長さ

玉の緒の

長さ

栲繩の

長さ

檜柴の

馴れ

藤衣 劍太刀 み空行く 劍太刀 漕ぐ舟の 赤のりこの 繩海苔の 紫の 衣手の 春鳥の 朝鳥の 鳴鶴の 庭漆の 光る神 幣帛を

赤れ 汝が心から(太刀に銘あるものあり) 名の惜けくも 名のをしけくも 名 名り告らじ 名りそものらじ 名高の浦 名木か川(長) 鳴きにかさつゝ なきのみ泣かむ 赤きにし泣かむ 流るゝ涙 鳴る 奈良(並)

ふる衣

くさらの山(着馴)

唐衣

きさらぐ里

青丹吉

奈良

おしける

難波(浪速)

蘆か散る

さとり

績麻さす

長柄の宮

うみをさす

長門の浦

我命を

長門の島

さゝ波の

連庫山

津の國の

難波

津の國の

泣かず(長洲)

(12)

若草の

新手枕

かさつべた

匂へる妹

かさつべた

にはへる君

つゝし花

にはへる君

山吹の

にはへる妹

朝日影

にはへる

蜻蛉羽に

にはへる衣

秋の葉の

にはひに照れる

さゝら形

錦

眞金ふく

丹生(丹の赤色あり吹く金の赤さにかく)

(ぬ)

夏草の

野島(菱の約ぬとなる)

荒妙の

布

百傳ふ

ぬて(ぬての鈴の古言にて驛路の鈴は何處までも傳ふるものあり)

雨の降る

こぬれ(木抄)

手向ぐさ

さぬ(幣)

(ね)

さす柳

根ねのね梓そう

管の根の

ねもころ

川柳

ねもころ

鳥羽玉の

寐ゆてのゆ晩ばん(夜を略す)

泣子なあす

音ねのみなきつゝ

手童ての

音ねのみしあかゆ

蘆鶴あの

ねにのみあかゆ

(の)

さね葛かつら

後のちか逢あひむと

行水の

後のちもあひあむ

能登川の

後のちに逢あひむ

漕く船に

乗りし心

鵓うす鳥との

咽のど呼よび

(は)

あからひく

肌は(明美あけみあり肌はあり)

飛鳥の

いや來きましあむ

毛衣けを

ゐる(張)

打靡うく

春はる(葉)

梓す弓

春はる(張)

木の芽きのゐる

春

み冬み盡とき

春はるさうくれい

冬ふゆもり

濱邊

勇魚ゆう取とり

濱邊

白浪しろの

濱邊

鶉うすあす

いひもどほり(打道廻)

まじもの

いひをかまひ(這拜、拜まが折まれ屈かむあり)

垂乳ねの

母

たらししや

母

柞葉の

母

隠りくの

母

蚤小舟

泊瀬

三日潮

泊瀬の山

鳥通ふ

播磨

大鳥の

羽田

玉葛

ながひの山

(ひ)

天離る

部

あからひく

日

あかねさす

日

あかねさす

晝

高光る

日の御子

高光る

日の宮人

天傳ふ

日笠の浦

天傳ふ

入日さしぬれ

新玉の

一夜も落ちず

夕日の

日照る國

天照らす

日照る國

さしのぼる

ひるめのみと

現身の

人

千早振

人

白玉の

人

陽燄の

日

かさろひの

ひとめ(人目)

檀の實の

ひとり

鹿兒じもの

我ひとり子

猪じもの
つるき太刀
真木割く
引け鳥の
瑞籬の
濱久木
高麗錦
さにつらふ
白檀弓
衣手の
梓弓
さゝ波の
大ぬさの
橋葛

(ふ)

膝折り伏せて
日嗣の皇子(太刀の身に血漕ある故に日にかく)
檜の御門
我ひけゆけい(引鳥の囿に引かれて寄る鳥あり)
久しき
久しくありぬ
紐
ひも
飛驒(引撓)
常陸(巖)
引津
比良山風
引手あまた
引かぬるく

み雪ふる
蘆垣の
鶉鳴く
うつらさく
さゝ波の
石の上
いその上
どの曇り
少女等か
いゆ人の
菅原や
にはどりの
真木柱
深海松の
荒妙の

枕詞

冬

古りぬる里
ふりにし里
ふるし
舊き都
布留(石上、布留、共に地名なり)
袖ふる川
雨ふる川(どのいたち即ち足並よて一面の義)
袖ふる山
伏見(射部人の伏して獸をねらふなり)
伏見の里
ふたり並ひ居
太き心
ふかめ
藤原

かき敷ふ
み櫛笥の
玉くしげ
まそ鏡
時つ風
白たへの
とふさたて

二上山
二上山(蓋)
二上山
二上山
吹飯の濱
藤江の浦
船木伐り(杣人大木を伐りまつ梢をさきり山上に立て、山神をまつる
是をとふさといふ)

(へ)

焼太刀の
菰
たみこも
八重疊

(は)

へつかふ(鞘を隔て、身に附く意なり)
平群の阿曾(菰邊の繩を隔て、編む故にへにかく)
平群の山
平群の山

蘆垣の

外(穂)

盛なと

はのか

かきろひの

はのか(火の穂といふよりつく)

いさひひの

はにかいてまむ

焚ける火の

はにそいてぬる

もゆる火の

火中

朝霧の

はのめかし(はのの朦朧の意)

旗

穂に出し吾をや

彌穂

穂積のあそ

水蓼を

穂積

磯輪上

秀真國(日本紀に伊弉諾尊曰此國磯輪上秀真國云々あり此國と

うちのほる

佐保(保の火の意)

(ま)

朝霧の

思ひ感ひて

くもり夜の

迷へる

藤きみの

思ひまつりし(なみり靡にてまつりしは纏あり)

石橋の

間近き

藤衣

間遠(織目の間遠なり)

まきたへの

枕

玉 鉏

寝し妹

股海松の

又

石 綱

また若がへり(別れ返る意あり)

さゝれ波

間きくも

松か根の

まつ

遠つ人

松浦の川(待)

とほつ人

松浦さよひめ

とほつ人

松の下道

妹の袖

巻來の山

(み)

兒らが手を

巻向山

奥山の

真木の板戸を

まろ鏡

まさめ(正見の轉)

大口の

真神の原(真神の狼といふ)

うつゆふの

真狭國(うつゆふは蘭をいふ狭にかゝる)

住のぬの

松

白菅の

真野の榛原

山菅の

みさらぬ(實)

山菅の

みたれ

鳴神の

見れば長し(鳴神の雷なり)

まそ鏡

見

玉 鉏

道(八千矛神矛を執りて道を開きたれのかくいふ)

蘆垣の

思ひみたれて

新菫の
解き衣の
玉の緒の
菅の根の
劔太刀
まそかゝみ
犬じもの
百しぬの
鴨じもの
うち日さす
朝日の
夕日の
木の根の
竹の根の
さす竹の

思ひみたれ
おもひみたれ
おもひみたれ
おもひみたれて
身に添ひ寝ねば
見れども飽かめや
路に伏してや
美濃の國(簀の毛の悉く萎ふ故にかくいふ)
水よ泛き居て
都
日照る宮
日かげる宮(かげるの影入なり)
根のふ宮
根足るみや
宮

さそ竹の
雨こもり
高座の
大君の
君の着る
味酒
うまさけ
玉くしげ
御食向ふ
空せ貝
ありさぬの
珠が目を
ことひうしの
まそ鏡
大伴の

大宮人
三笠の山
三笠の山(御蓋)
三笠の山
三笠の山
三輪(釀の略みとなる)
三諸の山
三諸の山(櫛笥の身といふ意)
南淵山(鮭の貝の名食に供す)
寶なき
三重
見そめが崎
三宅の瀛(殊負牛の寮飼の意)
みぬめの浦
御津の濱(神武天皇の御製にみつくし久米の子等とあり久米の子

大伴の

等の大伴氏の幸ぬし兵士なり故にみつどか

難波なる

見つとつらじ

鏡あす

みつともいふ

吾壘

みつの濱(見)

葦原の

三重の河原

花籠

瑞穂の國

福草の

めさらぶ(目並)

妹が目を

みつり(三葉)

見まぐ堀江(欲)

(む)

朝つく日

向ふ

朝つく日

むかひの山

まそ鏡

向ふ

山たつの

むかへ(山たつは造木にて葉の相對ひて出づるものなり)

茜さす

紫(紫は赤が本になる色なり)

秋草の

結びし紐(實を結ぶ意)

沖つ鳥

胸見る

行く鳥の

群り

群鳥の

むら立ちゆけば

玉はやす

武庫(玉を磨き染すに)棕の葉を以てすればむこにかよはして

へり

空し國(背肉の身なしの意)

(め)

味さばふ

めこと(見言にて見ること言ふことありて味さばふは味鴨多歴に

味さばふ

て多は群ありむれの約めとある故にかくつらく)

あちさばふ

めがはる君(見ま欲る君なり)

あちさばふ

目には飽けども

あちさばふ

妹かめ

起つ鳥の
ぬえ草の
藤なみの
吹く風の

め
めにしわれは(菱草の芽といふより妻にかく)
たゝひどめ(なみのみぞめに轉ぎ)
月に見ぬ

(も)

かきろひの
さにつらふ
早蕨の

もゆる
紅葉
萌え出る春

(や)

あしひきの
朝霞
あしひきの
つまごもる

山
八重山
やつを(彌峯)
矢上の山(爪隠る矢とつゝく)

つまごもる
ましまの
空見つ

やの、神山
やまどの國(倭國磯城郡磯城島)崇神欽明二朝の都ありし所あり
やまどの國(饒速日命天の磐船に乗りて天虛より倭國に降る因りて
虚空見日本國といふ)
やまと

そらにみつ
あさつしま

やまと(神武天皇國狀を廻望し給ひて蜻蛉の臂帖せる如しと詔ひし
かばやがて日本を秋津洲といふ)

をたて山
つきねふ
うつそみの
まらのぼる
うつせみの
百傳ふ
ことたまたの
百足らず

大和(國の様四方山ありて小楯を並へたるやうなれはかくいふ)
山城(續嶺歴にて山つゝきの國なればかくいふ)
八十伴緒(諸臣あり現身の人よりかく)
八十氏人(參内の諸臣の義なり)
八十ことこのへり繁くとも(人言の繁き意)
八十の島回
八十の街(言の様々に言ひ別れたるより路股にかく)
八十限手

もゝたらす
 ものゝふの
 ものゝふの
 ものゝふの
 たゝあづく
 杖たらぬ
 山吹の
 さゞれ浪
 山菅の
 嶋島の
 白髪つく (ゆ)
 早川の

山田の道(やまのやの八十より轉す)
 八十もの(物部氏の部屬の多きをいふ)
 八十字治川
 八十の少女ら
 八十の心
 柔肌(楯並附矢とかゝる)
 やさかの長息(杖の丈あり衣に足らぬ八尺の長息とかゝる)
 やむ時もあく
 やむ時もあく
 やむ時もあく
 やます
 やます
 止めバ續がる(聲によせていふ)
 ゆふ(幣)
 ゆくへも知らず

鹿じもの
 眞鍮もて
 小百合花
 大船の
 天雲の
 寄そる浪
 ふる雪の
 延ふ葛の
 天雲の
 こもり沼の
 行く雲の
 射る猪の
 天雲の
 をどめらに
 かきろひの

弓矢かこみて
 弓削の河原
 ゆりもあひむと(ゆりの許にて心解けて逢はむの意あり)
 ゆくら〜に(寛々)
 ゆくら〜
 ゆたけく
 行き
 行邊もなくや
 行きのまに〜
 ゆくへをしらず
 行きや別れむ
 行きも死あむと
 行き還りなむ
 行き逢ひの早稲
 夕さうくれの

猿人の杖

弓月が縁

(よ)

あちとらふ
青みつら
水たまる
梓弓
あつさゆみ
名くらし
斑鳩の
ぬべたまの
玉藻さす
荒垣の
夕日の
天雲の

夜登りす(寄)
依網の池(青雲池とかくる)
よさみの池
よらの山(引けり寄るといふよりよにかく)
末より寝む
吉野の山
よるかの池(寄)
夜
寄り寝し妹
餘所
よそ
よそ

現身の
眉引の
御心を

世
横山
吉野の山

(わ)

高麗劍
こまつるぎ
たまさける
朝露の
白玉の
鏡さす
はふ鷲の
天雲の
百傳ふ
大船の

わさみが原(環)
我影
吾(吾魂も極めるといふ意)
吾身
吾兒
吾念ふ妹
別れしくれバ
別れしゆけバ
度會班田(傳へ渡る意)
わたりの山

枕詞

五七

(る)

まなが鳥

猪名野(まなが鳥は意長鳥にて鵜飼の一名あり友を率ひて行く故

春霞

井上(居)

にむにかく)

(る)

朝月の酒

あみさかえ
餌香の市(醉のあよりうつま)

(を)

うちそを

麻績王(うちそは美麻(ま)なり)

佐倉麻の

麻生(ま)の下草

ものよの

男

さにつらふ

少女

真玉つく

遠近(緒)

またまつく

をちの菅原

玉たれの

をち野

玉藻かる

をどめを過ぎては地名

まらとほふ

小新田山(白く歴たる麻とつく)

玉たれの

小麻

駕籠の

惜しさ

夕月夜

小倉の山(小間)

新撰

終

新撰歌典終

明治二十四年十一月十五日印刷
明治二十四年十一月十八日出版

正價金六拾錢

版權登錄



編輯者

落合直文

小石川區掃部町三十三番地

發行兼印刷者

大橋新太郎

日本橋區本石町三丁目十六番地

發兌元 博文館

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地

345
07.28
76

●●●●●●●●●●
 實用地 應年用 少書年 身習書 獨在習 忠自習 教本育 假本育 國假

物類修 生類修 徒徒理 孝徒理 名語釋 體交釋 發文釋 國假

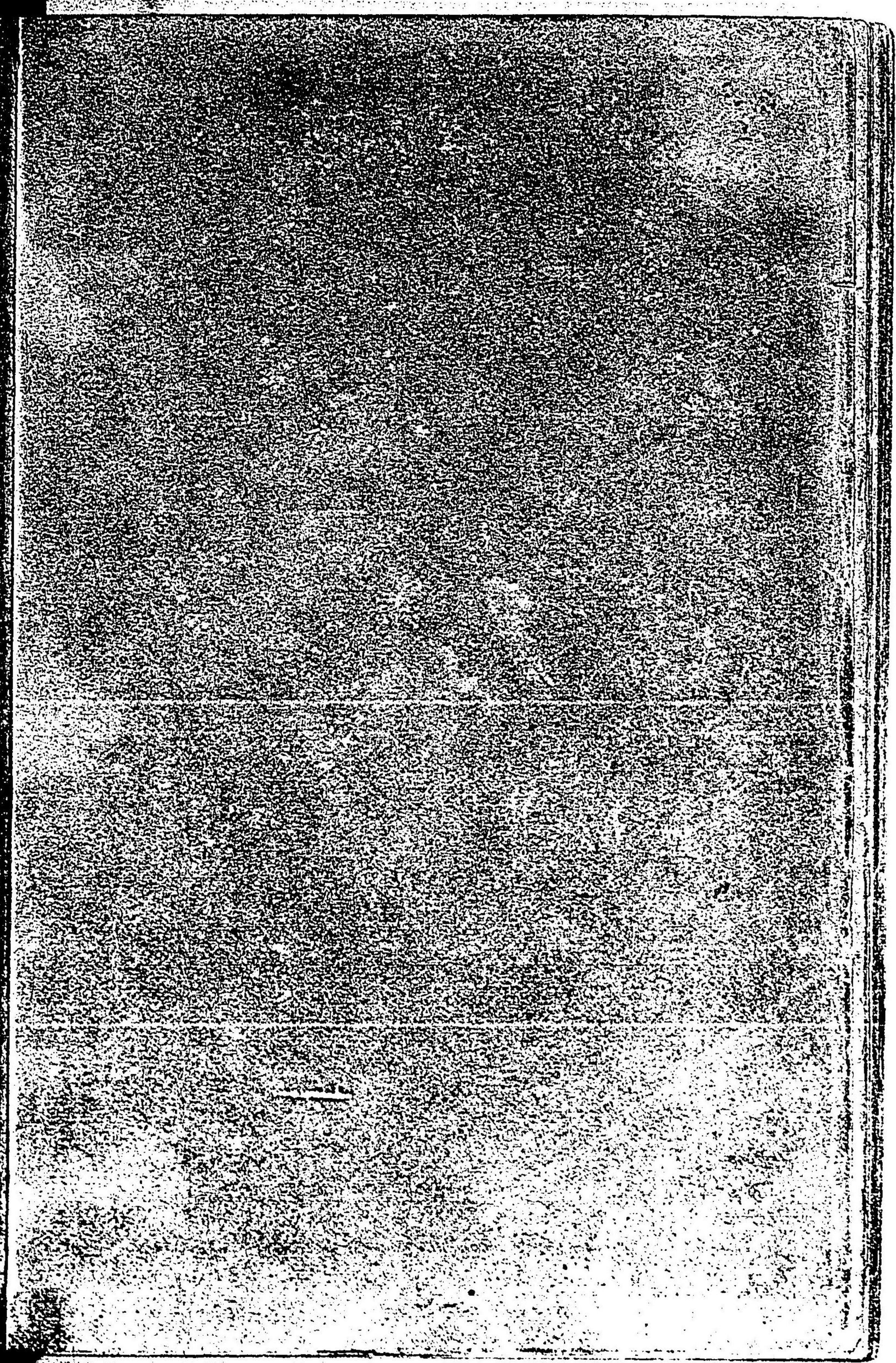
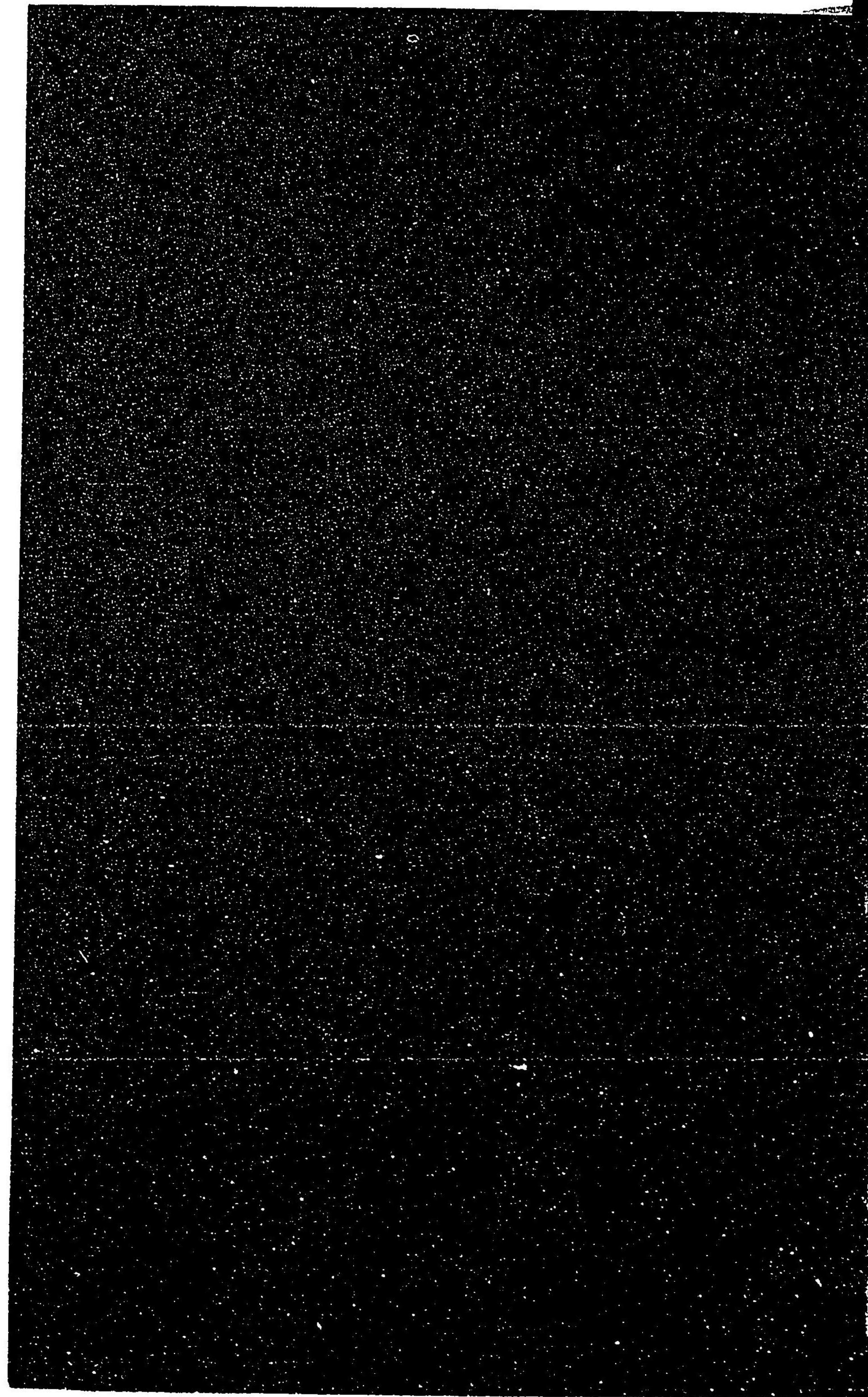
觀全三冊 寶全三冊 文全一冊 義全一冊 義全一冊 典全一冊 輝全一冊

竹內廣業坂下龜太郎君著 正價一冊金十二錢郵稅四錢
 谷口政德君著 正價一冊金十錢郵稅四錢
 谷口政德君著 正價一冊金十錢郵稅四錢
 福羽美靜君著 正價一冊金十錢郵稅四錢
 奧山千代松君著 正價一冊金十錢郵稅二錢
 田中平君著 正價一冊金十錢郵稅二錢
 賣價八錢郵稅二錢
 內藤耻君著 正價一冊金十錢郵稅二錢
 賣價八錢郵稅二錢

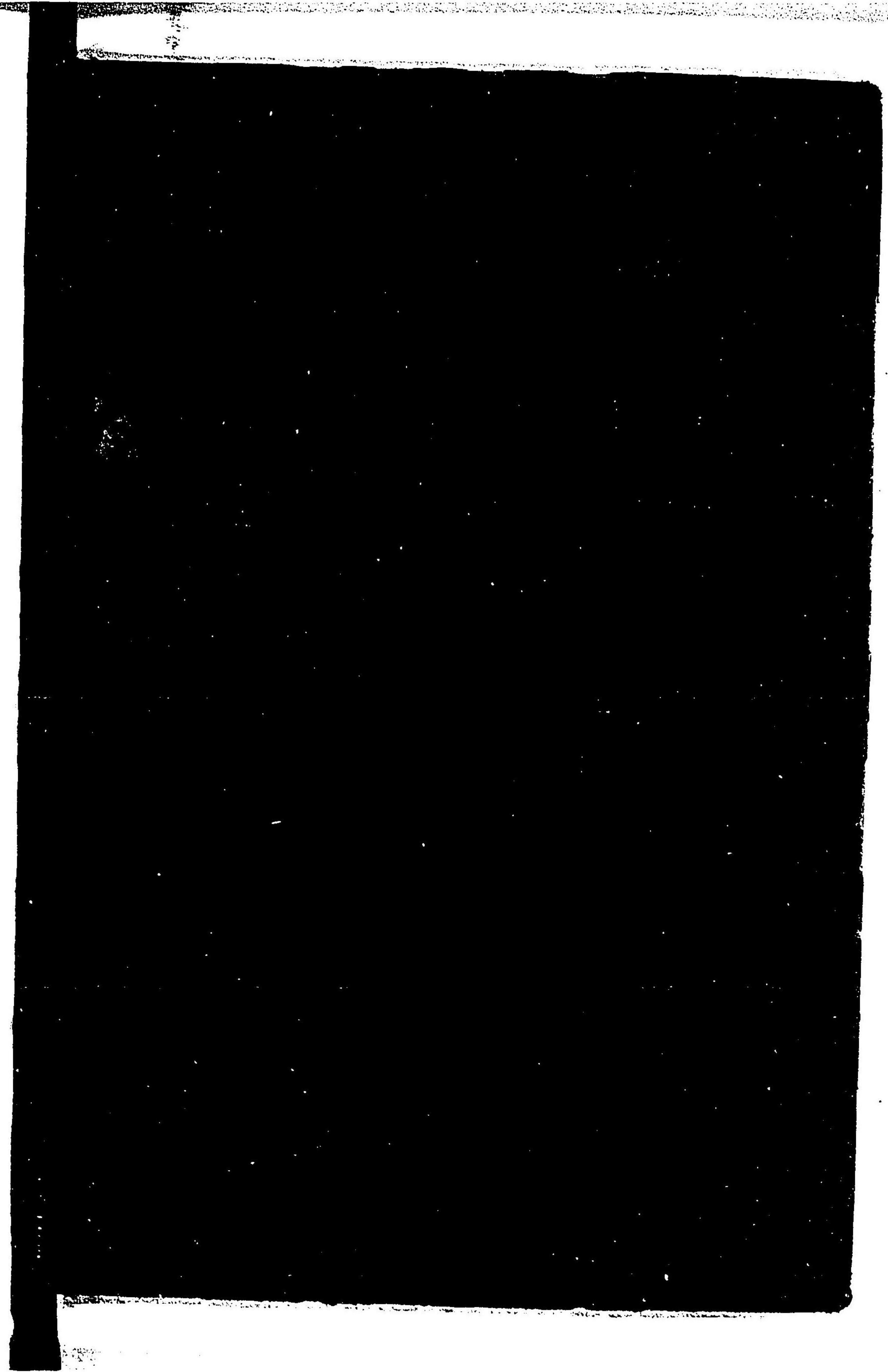
●●●●●●●●●●
 日日 本本 文文 學學 全全 叢文 讀史 本知 歌學 溫本 日曆 必少文近 家庭讀年藝古 教育

書全廿四部 書全十部 書全十部 庫全十部 本全十部

小中村合萩野三君校訂標註 正價金四圓七拾五錢郵稅二錢
 佐々木弘綱全信綱兩君校訂標註 正價金二圓五拾錢郵稅一冊六錢
 內藤耻君校訂 正價金二圓五拾錢郵稅一冊六錢
 內藤耻君校訂 正價金二圓五拾錢郵稅一冊六錢
 正價金二圓五拾錢郵稅一冊六錢
 小中村義象落合直文兩君著 正價一冊金拾二錢郵稅四錢



42
69



M

205204-000-9

42-69

新撰歌典

落合 直文/編

M24

EDV-0231



